

# 中学生のグループの様相と受容体験及び対決体験 ：性差を踏まえた検討

The aspects of groups of junior high school students and their experiences  
of acceptance and confrontation : Examination of Gender Differences

山口千鶴\*<sup>1</sup> 小川 毅\*<sup>2</sup> 巖 秀章\*<sup>3</sup>

Chizuru YAMAGUCHI Takeshi OGAWA Hideaki HOROIWA

## 1. 問題

### (1) グループとは

グループとは、「学校における教室移動や昼食を共にする特定の友人関係」である（佐藤, 1995）。野里・横山（2014）によれば、決まったグループに所属する中学生は75%であり、多くの生徒がグループに所属していることがわかる。

佐藤（1995）では、グループに所属する理由には大きくわけて二つあり、相談できる・支え合えるといった「複数からの安全保障の獲得」と、変わった人に思われたくない・浮いていると思われたくないという「浮いた存在になることからの忌避」であることが明らかにされている。グループに所属する理由には「入っていた方が楽しい」という積極的な面と「入っていないと不都合である」という否定的な面が見られ、後者の理由によってグループに所属している生徒は、「誰かと一緒にいること」が友人付き合いの目的となり、周囲への過剰な気を遣いから情緒的な交流が生まれにくいと考えられる。

友人グループに関する先行研究をみると、野里・横山（2014）の研究において否定的なグループに所属している中学生は拒否不安が高いこと

や、ネガティブな印象を持たれないようポジティブに自己表明を行うこと、石原ら（2009）の研究では、否定的な友人関係スタイルの中学生は、学校適応や自己肯定意識が低いこと、吉原・藤生（2012）では、グループの否定的な様相がストレスやストレス反応につながるものが明らかにされており、グループの在り方は生徒への心理的な影響が大きいと考えられる。

### (2) グループの様相

武藤・河村（2015）は、学校現場において活動しやすいようグループ状態認知尺度をもとにグループの様相を表す4類型を抽出した。それによると、グループの状態認知とは「個人がグループをどのように捉えているか」という状態であり、「支援性」「開示性」「親密性」「相互侵害」の4因子がある。各類型の説明は以下の通りである。

肯定優位型：支援性、親密性、開示性が高く、相互侵害が低い群。グループに所属している理由は安全保障の獲得のみ。

消極型：支援性、親密性、開示性、相互侵害全てが低い群。グループに所属しているがグループへの意識や思いやり得点の低さが見られ、孤立傾向のある児童生徒が集まっていると考えられる。

\*1 埼玉工業大学大学院人間社会研究科心理学専攻

\*2 埼玉工業大学基礎教育センター

\*3 埼玉工業大学人間社会学部心理学科

アンビバレント型：支援性、親密性、開示性、相互侵害すべてが高い群。いじめが生起する可能性があげられる。グループに所属する理由として、「安全保障の獲得」と「浮いた存在になることの回避」がある。

否定優位型：支援性、親密性、開示性が低く、相互侵害が高い群。いじめが生起している可能性がある。グループに所属する理由は「浮いた存在になることの回避」のみであり、閉鎖的思考が高いことから、グループに依存的であるといえる。

### (3) 受容体験及び対決体験

受容体験・対決体験とは、集団における交流によって生まれる経験である。受容体験は「心理的安心感を得る体験」、対決体験は「自己吟味を促される体験」である（巖谷, 1996）。

巖谷（1996）は望ましい人格変化には他者から受容されている感覚と、自己吟味を促される対決の両方が必要であることを明らかにしている。

グループで受容・対決の体験をすることは、中学生の心理的成長に寄与すると考えられるが、グループの様相を考えると利己的な関係による結びつきが強い類型では心理的安心感を得にくい、表面的な結びつきに終始する類型では自己吟味を促される体験を得られにくい、とも考えられる。

## 2. 目的

中学生の多くが友人グループに所属しているが、その様相は様々である。グループの類型により交流には差があり、心理的成長につながる受容体験及び対決体験の経験に影響を与えていると考えられる。思春期の生徒のグループでの体験には性差が見られると思われるため、本研究では、まずグループ状態認知尺度の類型の実際を調べ、そこでの性差を見るときともに、グループにおける受容体験及び対決体験の性差を検討する。

## 3. 研究1

### (1) 目的

中学生の友人グループの様相を把握するために、クラスター尺度を用いてグループ状態認知を測定する。

### (2) 方法

#### ①調査対象者と調査時期

公立中学校に通う2、3年生275名（男子135名、女子139名）を対象とし、20XX年Y月に調査を実施した。実施は学校長への事前説明のもと、担任による質問紙の配布、回収を行った。その際、匿名性の保持と研究目的以外の使用はしない旨を説明してもらい生徒の了承を得てもらった。

#### ②使用尺度

1) 武藤・川村（2015）によるグループ状態認知尺度を使用した。4因子16項目。「あてはまる」「ややあてはまる」「ややあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で回答を求めた

2) 巖谷（1996）による受容対決質問紙を使用した。友人グループ用に一部質問内容を変更した。2因子20項目。「あてはまる」「ややあてはまる」「ややあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で回答を求めた。

### (3) 結果

#### ①分析対象

調査を実施した275名のうち、記入漏れや無回答を除いた224名（男子114名、女子110名）を以後のデータの分析対象にした。

#### ②各尺度の分析

##### 1) グループ状態認知尺度

主因子法、プロマックス回転による因子分析を行い、因子負荷量が.40以下であった第一、第十、

第十二項目を除き再度因子分析を行った。固有値の変動と因子の解釈可能性から3因子が妥当であると判断し、第一因子を「親密性」、第二因子を「相互侵害」、第三因子を「支援性」と命名した。信頼性係数は「親密性」因子が.80、「相互侵害」因子が.76、「支援性」因子が.69であった。分析結果をTable. 1に示す。

## 2) 受容対決尺度

主因子法、プロマックス回転による因子分析を行ったところ、先行研究と同様の「受容因子」「対決因子」の2因子構造が確認され、先行研究の因子構造を保存した形となった。信頼性係数は「受容」因子が.92、「対決」因子が.89であった。分析結果をTable. 2に示す。

Table. 1 グループ状態認知尺度因子分析結果

	因子		
	1	2	3
5. グループの友達と休み時間や放課後に一緒に過ごしたり遊んだりする	.767	.069	.033
3. グループの友達と一緒にいるのが好きだ	.755	-.058	.035
11. グループの友達同士は仲が良いと思う	.686	-.170	.032
16. グループの友達とは学校外でも一緒に遊ぶ	.542	.156	.054
7. グループの友達の好きなことや得意なことについて知っている	.505	.104	.155
6. グループの中でもめごとがある	-.138	.774	.208
15. グループの友達の中で悪口を言ったり言われたりすることがある	.036	.725	-.181
2. グループの友達の友達同士で喧嘩をすることがある	-.039	.628	.300
9. グループの友達の中でひやかしやからかいがある	.266	.611	-.308
13. グループの友達とよく話あってトラブルを解決する	-.016	.066	.707
8. 自分一人ではできないことをグループの友達同士で助けあう	.200	.027	.486
4. 何か失敗をしたときにはグループの友達どうしで励ましあう	.234	-.193	.485
14. グループの友達と競いあってお互いを高めあう	.145	.024	.401

Table. 2 受容体験及び対決体験尺度の因子分析結果

	因子	
	1	2
6. グループの友達は私らしさを認めている	.804	-.025
19. グループの友達は私を認めている	.799	.006
10. グループの友達は私らしさをよくわかってくれている	.797	-.070
4. グループの友達はありのままの私を尊重している	.787	-.098
14. グループの友達は私のありのままを受け入れている	.768	.014
1. グループの友達は私を受け入れてくれている	.755	-.034
2. グループの友達は私を安心させてくれる	.727	-.071
18. グループの友達は私の在り方を尊重してくれている	.700	.132
11. グループの友達は私の気持ちを落ち着かせてくれる	.677	.023
17. グループの友達は私を信頼している	.672	.054
9. グループにしていると自分のことについて考えさせられる	-.076	.803
12. グループの友達は私が今のままでいいか考えさせる	-.021	.766
20. グループの友達は自分というものを深く考えさせる	.041	.765
5. グループの友達は自分が今のままでいいかを考えさせる	-.091	.756
8. グループにしていると私らしさとは何かと思わせる	.060	.719
13. グループにしていると私らしさが問われる	.017	.646
15. グループの友達は私のことを見直させる	.079	.635
16. グループの友達私に自分の在り方を問いかけてくる	-.086	.625
3. グループにしていると自分自身が問われる	-.074	.585
7. グループにしていると自分について向き合わせてくれる	.328	.475

③クラスター分析による類型の抽出

武藤・河村（2015）に倣い、グループ状態認知の類型を抽出した。各尺度得点のユークリッド距離を求め、ward法によるクラスター分析を行った。クラスター数を2つから6つに設定し分析を行ったところ、3クラスターが妥当であると判断し以降の分析を行った。

分析の結果、クラスター1は、親密性、支援性が高く相互侵害が低かったため、肯定優位型と解釈した。クラスター2は、どの因子得点も高かったため、アンビバレント型と解釈した。クラスター3は、他のクラスターよりも各得点が低かったが、肯定優位型と似たような様相を持つことから消極肯定型と解釈した。

クラスターごとの三つの因子得点をFigure.1に示す。

(4) 考察

先行研究では肯定優位型、否定優位型、アンビ

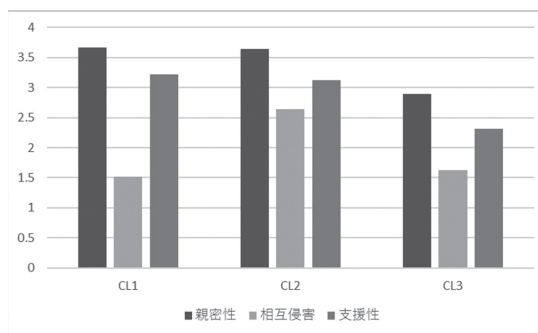


Figure. 1 クラスターごとの因子得点

バレント型、消極型の4類型が抽出されたが、本研究では3類型が得られた。否定優位型が抽出されなかった理由として、トラブルへの早期介入といった学校のいじめ問題への取り組みが効果として現れたためと考えられる。

肯定優位型に近い様相を持つ消極肯定型が抽出された理由として、グループ維持のために表面的な友好関係を築くことが増えている可能性が考えられる。相互侵害は少ないものの、表面的な関係

であるために、親密さや支援的な関わりが深まらないのではないだろうか。

## 4. 研究2

### (1) 目的

研究1で得られた結果を基に、各クラスターの下位因子の性差を検討する。

### (2) 方法

各クラスターでの性差を検討するために、研究1で得られたデータを使用し、下位因子ごとにt検定を行った。

### (3) 結果

t検定の結果、クラスター1（肯定優位型：男子37名、女子59名）、クラスター2（アンビバレント型：男子45名、女子30名）、クラスター3（消極肯定型：男子32名、女子21名）の全てのクラスターにおいて有意差は認められなかった。結果をTable.3に示す。

### (4) 考察

性差が認められなかったということは、男女におけるグループの状態の捉え方に違いがないとい

うことである。このことは、現代において思春期青年期の入り口である中学生は、男女にかかわりなく、同じ付き合い方でグループを形成していることを示唆するものである。

## 5. 研究3

### (1) 目的

研究1で得られたデータを基に、グループにおける受容体験・対決体験の、性差を検討する。

### (2) 方法

研究1で得られたデータから受容体験・対決体験の性差を検討するためにt検定を行った。

### (3) 結果

受容体験は男子(114名)平均3.08、SD 0.58、女子(110名)平均3.29、SD 0.56、 $t(222) = 2.67$ 、 $p < .01$ で女子の得点が有意に高く、対決体験は男子(114名)平均2.47、SD 0.61、女子(110名)平均2.41、SD 0.66、 $t(222) = 0.781$ 、n.s.で、男女に有意な差は見られなかった。

### (4) 考察

女子の受容体験の得点が有意に高かった理由と

Table. 3 クラスターごとのt検定結果

		男性		女性		t 値
		平均	SD	平均	SD	
CL1	親密性	3.70	0.33	3.66	0.31	0.62
	相互侵害	1.59	0.40	1.48	0.38	1.4
	支援性	3.19	0.33	3.24	0.35	0.73
CL2	親密性	3.64	0.38	3.65	0.36	0.15
	相互侵害	2.70	0.40	2.57	0.49	1.28
	支援性	3.08	0.46	3.19	0.64	0.89
CL3	親密性	2.90	0.73	2.87	0.58	0.21
	相互侵害	1.63	0.48	1.65	0.60	0.20
	支援性	2.35	0.43	2.26	0.40	0.76

して、女子の方が情緒的なかかわりが多く、受容体験が増す機会が大きかったためと考えられる。対決体験に有意差が見られなかった理由として、男子の友人グループの在り方が変化してきている可能性が考えられる。男子は女子に比べ攻撃性が高く（武藤・河村, 2015）、それに伴い対決体験が多く生起しても不思議はない。しかし、本研究において特にそのようなことを示唆する結果が見られなかったことから、男子の友人グループにおいても、攻撃性を表したり互いに競ったりする関係を持つよりも、表面的に群れることを重視した関わり合いが増加しているのではないかと考える。

## 6. 総合考察

### (1) 中学生のグループの在り方の特徴

本研究で得られたグループ認知類型のうち、先行研究と異なる特徴を示したものは消極肯定型である。これは、これまで消極型に分類されていた、「イツメン」（岩宮, 2012）という言葉で表されるような孤立傾向の生徒らが、最低限の他者との交流を維持するようになったことを窺わせる。

### (2) 男女の受容体験、対決体験の相違

女子の受容体験が男子より有意に高かったことは、女子の情緒的交流が親密性や相互信頼性の高いものであることを示すと思われる。

一方対決体験において性差が見られなかったことは、自己吟味を促す体験に男女差がないということでもある。対決体験の平均が男女とも高くはないことを考えると、中学生段階においてグループは、相互に自己吟味を促すほど成熟していないとも考えられるのではないかと。

### (3) 中学生のグループへのかかわり方

本研究の中学生のグループの類型には、先行研究でいじめの温床の一つと考えられた否定優位型

が見られなかった。これは学校のいじめへの取り組みによる影響によるものだと考えられた。今後は、いじめにつながる可能性がある指摘されたもう一つの類型、アンビバレント型への取り組みが課題となると思われる。今回のアンビバレント型の特徴として、相互侵害がそれほど高くはないことが見られるため、このようなグループに対しては、自分たちで問題解決ができるような手助けを積極的に行うことが有効ではないだろうか。

また、グループ認知と受容体験・対決体験との関係を見ることも、今後の課題である。

## 7. 引用文献

- 巽岩秀章 エンカウンター・グループにおける人格変化に及ぼす「受容」と「対決」の影響についての研究. 国際基督大学教育学研究科博士学論文, 1993.
- 石本雄真・上長然・久川真帆・齊藤誠一・則定百合子・日瀨淳子・森口竜平 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究 (20). 2 125-133, 2009.
- 岩宮恵子 「ほっち」恐怖と「イツメン」希求現代思春期・青年期論. 精神療法38 (2), 233-235, 2012.
- 武藤由佳・河村茂雄 小・中学生のグループ状態認知尺度の作成—グループに所属する理由および被侵害との関連—. カウンセリング研究48(3), 133-148, 2015.
- 野里有希・横山剛 中学生の仲間集団の特徴と拒否不安および自己表明との関連 文京学院大学人間学部研究紀要 (15), 259-271, 2014.
- 佐藤有耕 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析. 神戸大学発達研究紀要 3 (1), 11-20, 1995.
- 吉原寛・藤生英行 高校生の友人グループが主観的学校ストレスとストレス反応に及ぼす影響. 学校心理学研究 (12), 15-27, 2012.